

デンマーク日記

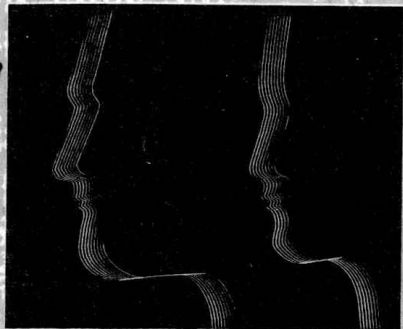
女性大使の覚え書

高橋展子



デンマーク日記

女性大使の覚え書



高橋展子

東京書籍

高橋展子(たかはし のぶこ)

旧満州生まれ。東京女子大学卒(英語専攻)、早稲田大学卒(社会学専攻)、労働省婦人少年局長、労働保険審査会委員、ILO事務局長補(在ジュネーブ)などを経て、一九八〇年五月より一九八三年十一月まで駐デンマーク大使。一九八四年三月退官後評論活動。

著書

「ジュネーブ日記」(日本労働協会)、「私の英語修行」(潮出版社) など。

デンマーク日記——女性大使の覚え書

一九八五年五月二十七日 第一刷発行
一九八五年九月一日 第四刷発行

定価 ● 二二〇〇円

著者 ● 高橋展子

発行者 ● 小高民雄

発行所 ● 東京書籍株式会社

東京都台東区台東一丁目六番二二

印刷・製本 ● 図書印刷株式会社

©Nobuko Takahashi 1985, Printed in Japan

紙丁・落丁の場合はお取替いたしませう

ISBN 4-487-75057-1

目次

1 プロローグ ————— 7

ある晴れた日に…………… 8

その前のこと…………… 16

もう一つ前のこと——まずはご同慶…………… 19

2 幕あきまで ————— 27

3 仕事三昧 ————— 59

あいさつ回り…………… 60

クジラも豚も飛行機も…………… 70

つぎの問題……………83

門前の小僧……………91

デンマーク語……………103

至るところ青山……………108

4 パーティー……………111

外交パーティー……………112

一人二役……………116

四つ葉のクローバー——アジア・ランチョン……………123

親衛隊……………126

ヨコメシの効用……………128

くつろぎの仲間……………134

5 バカンス……………139

バカンスといひましても……………140

私のバカンス	146
不思議な規則	149

6 女性大使ゆえに 153

プロトコールてんやわんや	154
名刺の作り方	161
色留袖始末記	166
衣装えらび	170
稀少価値	175

7 やっぱり驚いたこと 179

運転免許証	180
日本にはなかなか帰れない	183
ムーンライター	185
これが選挙?	187

入牢の順序……………192

空家占拠……………193

インフオーマルの意味……………195

カラテ道場……………198

首相外遊と夫人の職業……………199

お通り、お通り……………200

8 おりおりの記……………203

ハマーシヨルドの墓……………204

徴税能力、納税能力……………206

むこうの新聞、日本の新聞……………210

未セットにつき——面白い言葉……………214

生産性の謎……………218

比例代表制……………221

外国語教育……………223

外交一元化……………227

外交官の夫人たち……………230

カタギとノン・カタギ……………235

拝啓外務大臣どの——気付きの点……………238

9 スーホルムパーク・ナンバー3……………243

美邸売りたし……………244

樹と水と鳥たち……………247

水入らず——I & A……………249

10 コペンハーゲン発、日本の友人へ……………255

お隣りのおばあちゃま——誇り高く自立する老後……………256

子供天国……………261

植村直己さん、そしてグリーンランドのこと……………267

福祉国家も火の車……………272

11

女王さまのプロフィール……………278

お伽の国でしようか……………284

デンマークの病院で……………290

姓を変えるのはいやです……………295

トニー君の進学——この国の教育制度……………300

デンマーク・アズ・ナンバーワン……………306

エピローグ……………313

カルチャー・ショック……………314

あとがき……………316

装画——司修
章扉写真提供——

1 PRESS NIHONKEIZAI 2 4 10 朝日新聞社
3 PHOTOGENIC 8 HKW VIDEO WORK SHOP

1 プロ ロー グ



大平首相へ大使就任のご挨拶。

ある晴れた日に

一九八〇年五月半ば、私はデンマークに着任した。

海外勤務は二度目である。前回は、一九七六年から二年間、国際公務員としてジュネーブのILO本部に勤めた。今回は外務公務員として大使館勤務である。前回と同様、単身赴任。そして前回と同様、未知の世界に入ろうとしているのである。——これまでも、臨時雇いの外交官として国際会議に出たことも何度かあったし、いくつかの日本大使館の仕事ぶりや大使公邸の生活を垣間見てはいたわけだが、すっぽりとその中に身をおくこと、そしてその運営の責任をとる立場になることはまったくはじめてだから、未知の世界といつてよいだろう。

前回と違う点は、ジュネーブの場合は年来の友人がかなりいたのに、今回は新しい職場にも土地にも、一人の知人もいないことだ。

が、そのことは、とりたてて気になることではない。デンマークは、ずっと昔しばらく滞在して以来、関心と愛着を持っていた国だし、新しい職場である大使館は、何といつても「日本

の役所”なのである。他の日本の役所と比べると、いくらかバタ臭いかもしれないが、国際機関のオフィスと比べればたいしたことはあるまい。そして、同僚となる人たちは、組織で仕事をすることをよく知っている日本の官僚である。

「自然体でおやりなさい」と、畏敬する先輩が言われた。ここではそれができるだろう。競争社会を絵に描いたような国際機関のオフィスでは、意識的にスタンスを変え、しょっちゅう自分でネジを巻いている感じで、とても自然体というわけにはいかなかったが。――

機内アナウンスが着陸を告げる。

午前六時二十分、窓外は快晴。

パーサーが、はやばやとドアの方へ案内する。後部座席にいた同道の料理人I青年とハウスキーパーA嬢もスチュワーデスにうながされて続く。

「タイシよ」

との乗客のささやきが耳に入る。そうだ、今回はもうここから仕事が始まるのだ。

さあ背すじをのばして。

ドアがあいて日航の支店長Y氏が機内に出迎え。先導に従って蛇腹のパスセージを出切ったところに大使館の参事官夫妻、館員数名、当国外務省儀典官等が待つ。みんな初対面。長い通

路を花束をかかえて渡る。

VIPルームで館員十名ほどに対面。早朝からご苦労さま。紅一点は二等書記官のN嬢。男子はみんな同じよう。とても覚えきれない。が、とにかくみんな明るくさわやか。さすが外交官。

外に出ると、まだ七時というのに、陽はすでに高く、道も建物もきらきら光ってまばゆい。底がぬけたように青い空。そしてこのひんやり乾いた北欧の空気。ああ、まさに、これが好きだからデンマークに来たのです。

空港から朝の街を走って公邸へ。二十分ほどのドライブ。

“何とか公園”と表示のある、古ぼけた石の門柱の間を入れて三十メートルくらい。左側の二軒め。落葉色レンガ造りの三階建て。玄関ドアの上に大きな菊の紋章。

通いのメイドの日本婦人が最敬礼で迎える。

参事官と庶務担当の書記官の案内で、邸内を一巡する。

「ここがブルー・ルームです」

なるほど、じゅうたんや家具の色調が青っぱい。やや横長の、三十畳くらいのサロン。和風キャビネットの上に両陛下の写真。明るくて落着いた、よい感じの部屋だが、何よりも窓から

の眺望がすばらしい。

このサロンの左にイエロー・ルームなる小サロン、右に食堂、とつながる。要するに、南に面して横に長い間取り。

北側は玄関、ホール兼階段室、台所、パントリー（食器室）等。

玄関わきのホールから二階へ上る。眺望はいちだんとよくなる。

ここ二階はプライベートな居住部分で、居間兼書斎、主寝室、それに付随して大きなバス・ルーム。広い中廊下には大きなリネン戸棚やもう一つのバス・ルーム、トイレなどがならび、その奥にゲスト・ルームと小さな個室二つ。これがサーパント用という。

ゲスト・ルームわきの階段を上がると三階。天井が傾斜した、いわゆる屋根裏部屋。小さな個室二つと広い居間、大きな納戸。

この公邸は小さいと聞いていたが、相当な広さではないか。

さらに地下室もある。地下室といっても半地下的で、高いところに窓がある。婦人客用洗面室、広い娛樂室、ワインセラー（酒貯蔵室）、大きな納戸、運転手休憩室、機械室等々。

とにかく一度では覚えきれない。あとで聞くと、総床面積七百五十平方メートル（約二百三十坪）の由。

圧巻は、何といっても庭である。

サロンの開口部からポーチに出る。一面の芝生と花壇と数多くの樹木。芝生のさきに続いて広がる湖。飛び交うかもめ。対岸に赤レンガの家数軒。両隣りの庭との境界は低い生垣だから、眺望は左右に広がる。

あれは何の樹か、三階建ての家屋よりも高い。こっちの樹はたいへんな枝の広がり。夏はすばらしい緑陰をつくるだろう。陽の光に透けて輝くその薄緑の若葉の美しさには声も出ない。深く息を吸い込みながら、この庭だけで幸せと思う。

「お休みになってください」

と参事官たちはオフィスに引きあげる。

しかし、ここで寝てしまうと時差ボケに苦しむことになる。I 青年とA嬢の部屋を決め、同じ便で持ってきた荷物をほどこ。A嬢が器用に始末してくれる。そのさなか、「大来外相一行八名が、訪英の途次乗りかえのため、三日後の月曜早朝、当地立ち寄り」の報が入る。

公邸で休憩していただき、朝食をさしあげることにする。早速にお目にかかれるのは嬉しいが、朝食準備が最初の仕事になろうとは意外。I 料理人と打合わせる。参事官夫人も手伝ってくださいとのこと。

星になる。あり合わせの材料で早速にIが、きれいな食事を作る^{**}。さすがと感心かつ安心。

日本なら、こんな場合はさしずめテンヤものだ。が、ここにはもとよりそういうサービスはない。通いのメイドM子さんは弁当持参。

十四時、館長車が迎えに来る。黒のプレジデント。運転手ミスターPは、血色の良い四十がらみの巨大漢。百キロはらくにある。大使館に八年勤務していること、十二歳の一人息子のいることなどゆっくりと話す。十分ほどで大使館につく。

大使館は、大通りに面したヨーロッパ風の石造り五階建ての大きな建物の二階である。アーチ型の大扉を押しあけて中に入り、階段を上ったところ。そこに厳重な扉があり、P運転手が鍵を入れてあげると小さな受付ホール、ガラス越しに確認した受付嬢がボタンを押すと、はじめて次の扉があいて館内に入れるしかけになっている。安全第一。

細長い廊下を左折して奥のつき当たりが大使室。三十畳ほどの横長の四角な部屋。ベージュ、こげ茶色を基調にしたインテリアはまあまあ。左手に会議用のテーブル、真中に応接用のソファ・セット、そして右奥に大使用の机、その上には例の「未決」「既決」の箱がおいてある。ほら、ここはやっぱり日本の事務所。ジュネーブではそれは「IN」と「OUT」だった。ソファ・セットのむきが気になるが、まあ、あとのこと。

ローカル・スタッフ（現地雇用の職員）が勢ぞろいしているところに出むいてあいさつをする。

老若男女の混成チーム十四、五名で、日本人も数名。総じて温和な感じ。大使秘書のミセスKとは、さっそく密接な接触が始まる。

館内を回る。少し前に引越してきたばかりで、すべて真新しく清潔。わりと広くて、館員はだいたい個室。この点ILOのオフィスと同じ。トイレは「女性大使」のために改装したとか。参事官と事務打合わせ。当面の日程、館務全般、文書の扱い、懸案事項等。

その最中に、東京の国会における大平内閣不信任案通過のニュースがとびこむ。びっくり仰天。これで大来外相来訪もふつとぶ。

電報を数通決裁。イラン問題等の政治案件。

十九時、館員夫人たちがあいさつに来邸。

十九時半、海辺のレストランで館員夫妻全員とディナー・パーティー。みなさん、はじめの印象にたがわずさわやか。N嬢は、デンマーク語の専門官だが、もともとはアラビア語を専攻した由。そういうえばNTVの美人キャスター小池嬢（この人もアラビア語）と風貌も似ている。夫人がた、当然ながら、みんなお若い。

夜の九時をすぎても明るく、レストランの窓外の樹々の新緑匂うばかり。春宵一刻は日本ばかりではない。